

【梁紀十二】 起昭陽赤奮若，盡閏逢攝提格，凡二年。

■梁、●北魏・西魏、**東魏**東魏、続国訳漢文大成 経子史部 第 9 卷 128p

高祖武皇帝+二中大通五年（癸丑，533年）

■**春正月**、辛卯(27-26+1=2日)、上は南郊に祀し、大赦す。

【爾朱兆滅亡後、魏主は高歡排除を画す】

●**〔爾朱兆の滅亡〕**魏の**寶泰**は**爾朱兆**の庭に奄至し、軍人は宴に因りて休惰す。忽ち**泰**の軍を見、驚き走る。追いて之を赤硃嶺（杜佑曰く、石州離石県に赤洪水有り、即ち離石水なり。赤洪は其の別名なりと。高歡が爾朱兆を破るは蓋し此の近きなるべし。山西省冀寧道離石県、現・吕梁市離石区）に破り、衆は並せて降散す。**兆**は窮山に逃げ、左右の西河の**張亮**及び蒼頭の**陳山提**に命じて己の首を斬りて以て降らしめんとす、皆な忍ばず。**兆**は乃ち乗る所の白馬を殺し、自ら樹に縊る。**歡**は親ら臨（哭する）み、厚く之を葬す。**慕容紹宗**は**爾朱榮**の妻子及び**兆**の餘衆を攜えて**歡**に詣りて降る、**歡**は義故（義旧）を以て、之に待すること甚だ厚し。**兆**之秀容に在るや、左右は皆な密に**歡**に款を通じ、唯だ**張亮**のみ疏を啟する無し。**歡**は之を嘉とし、(9-129p) 以て丞相府の參軍と為す。

●魏は諸行台を罷む。（天監 15 年に魏は李兵を行台節度と為し、硤石を攻める諸軍を統べしむ。魏初の制に踵ぎて之を置く也。正光の末、盜起こり始めて復た諸道行台を置く）

■辛亥（47-26+1=22日）、上は明堂に祀す。

●丁巳（53-26+1=28日）、**魏主**は其の父を追尊して**武穆帝**と為し、太妃の**馮氏**を**武穆后**と為し、母の**李氏**を**皇太妃**と為す。

●**營州**（続は**勞州**。勞州は、唐は**羈縻州**置き、宋は之に因り、今は闕。當に貴州に在り舊思南府境と中国古今地名大辞典にあり。營州は山東半島方面）刺史の**曹鳳**（その地の蠻左なり）、東荊州刺史の**雷能勝**（その地の蠻左なり）等は城を擧げて魏に降る。

●**〔帝は斛斯椿と專政〕**魏の侍中の**斛斯椿**（嘗てより歡を圖るの心あり）は**喬寧**、**張子期**之死（前卷前年にあり）を聞き、内に自ら安ぜず、南陽王の**寶炬**、武衛將軍の**元毘**、**王思政**と密に**魏主**に丞相の**歡**を圖るを勧める。

毘は、**遵**（道武帝の初め常山公元遵は佐命の功有り）之玄孫也。舍人の**元士弼**も又た、

「**歡**が詔を受けるに敬わず」

と言ひ、**帝**は是に由りて悦ばず。**椿**は**帝**に閣内都督の部曲を置くを勧め、又た武直（当直武士）の人数を増し、直閣より已下、員別に數百、皆な四方の驍勇なる者を選びて之を充てる。**帝**は數々出でて遊幸し、**椿**は自ら部勒し、別に行陳を為り、是に由りて朝政、軍謀は、**帝**は専ら**椿**と之を決す。**帝**は關中大行台の**賀拔岳**が重兵を擁するを以て、密に與に相い結び、又た侍中の**賀拔勝**を出して都督三荊等七州（三荊州と襄・南襄・涕郢・南郢）諸軍事、荊州刺史と為し、**勝**の兄弟（**勝**・岳）に倚りて以て**歡**に敵するを欲し、**歡**は益々悦ばず。

●**〔帝は高乾を懷柔せんとす〕**侍中、司空の**高乾**之信都に在る也、父の喪に遭うも、服を終わる暇あらず。**孝武帝**の即位するに及び、表して解職して喪を行わんと請い、詔して侍中を解くを聽し、司空は故の如し。**乾**は退くを求めると雖も、遽に許されるとは謂わず。既に内侍を去り、朝政は多く關預せず、居常は怏怏たり。**帝**は既に**歡**に貳（二心・反心）あり、**乾**が己の用を為さんことを冀い、嘗て華林園に於いて宴罷（おほ）わり、獨り**乾**を留めて、之に謂って曰く、

「司空は奕世忠良にして、今日復た殊效を建て、相い與に則ち君臣なりと雖も、義は兄弟に同じ、宜しく共に盟約を立て、以て情契を敦くすべし。」

殷勤に之に逼る。乾は對えて曰く、

「臣は身を以て國に許せり、何の敢えて貳有らん！」

時に事は倉猝に出で、且つ帝に異圖有るを謂わず、遂に固辭せず、亦た以て歡に啟せず。帝が部曲を置くに及び、乾は乃ち私に親する所に謂って曰く、

「主上は勳賢に親しまず、而して群小を招集し、數々元士弼、王思政を遣わして關西に往來して賀拔岳と計議せしめ、又た賀拔勝を出して荊州と為し、外に疏忌を示し、内（続により補充）に實に黨を樹てんと欲（続は無し）し、其の兄弟をして相い近づけ令め、西方に據有せんと冀う。禍難は將に作らんとし、必ず我に及ばん。」

乃ち密に歡に啟す。歡は乾を召して并州に詣らしめ、面のあたりにして時事を論じ、乾は因りて歡に魏の禪りを受けるを勧める。歡は袖を以て其の口を掩いて曰く、

「妄言する勿かれ！今司空をして復た侍中と為ら令め、門下之事は一に以て相い委ねん。」

歡は屢々啟して請い、帝は許さず。乾は變難將に起こらんとするを知り、密に歡に啟して徐州と為るを求め。 (9-130p) 二月、辛酉 (57-55+1=3 日)、乾を以て驃騎大將軍、開府儀同三司、徐州刺史と為し、咸陽王の坦を以て司空と為す。

■ 蕭衍はまた般若經七日 癸未 (19+60-55+1=25 日)、上は同泰寺に幸し、《般若經》を講じること、七日而して罷む、會する者は數萬人なり。

高車 ●魏の正光以前、阿至羅は常に魏に附く。中原の多事なるに及び、阿至羅は亦た叛し、丞相の歡は之を招撫し、阿至羅は復た降ること、凡そ十萬戸なり。

●三月、辛卯 (27-25+1=3 日)、詔して復た歡を以て大行台 (止めたばかり) と為し、宜に隨いて裁處せ使む。歡は之に粟帛を與え、議者は以為らく、徒費にして益無しと、歡は従わず。河西を經略 (曹泥を救い、及び万俟受洛干を取る時をいう) するに及び、大いに其の用を収める。

● 帝は高乾を謀殺、高敖曹・高仲密は晉陽逃亡に成功 高乾は將に徐州に之かんとし、魏主は其の機事を漏洩するを聞き、乃ち丞相の歡に詔して曰く、

「乾豈は朕と私に盟約有り、今乃ち反覆兩端す。」

歡は其の帝と盟するを聞き、亦た之を惡み、即ち乾の前後の數啟の時事を論じる者を取り遣使して封上す。帝は乾を召し、歡に對し之を責め使む、乾は曰く、

「陛下は自ら異圖を立て、乃ち臣を謂って反覆と為す、人主罪を加えるは、其れ辭す可けん乎！」

遂に死を賜わる。帝は又た密に東徐州刺史の敕して潘紹業に其の弟の敖曹を殺さしむ、敖曹は先に乾の死を聞き、壯士を路に伏せ、紹業を執り、敕書を袍領に得る、遂に十餘騎を將いて晉陽に奔る。歡は其の首を抱きて哭して曰く、

「天子は司空を枉害せり！」

敖曹の兄の仲密は光州刺史為り、帝は青州に敕して其の歸路 (仲密が東萊より渤海に帰るには道は青州を通る) を斷たしめ、仲密も亦た間行して晉陽に奔る。仲密の名は慎、字を以て行う。

●魏の太師の魯郡の王肅は卒す。

■丙辰 (52-25+1=28 日)、南平元襄王の偉 (蕭偉は蕭順之の八男) は卒す。

●丁巳 (53-25+1=29 日)、魏は趙郡の王謐を以て太尉と為し、南陽王の寶炬を太保と為す。

● 〔大成樂の復活〕 魏の爾朱兆之洛に入る（154 卷二年にあり）也、太常の樂庫を焚き、鐘磬は俱に盡く。節閔帝は錄尚書事の長孫稚、太常卿の祖瑩等に詔して更に之を造らしめ、是に至りて始めて成り、命けて大成樂と曰う。

● 〔耿翔の叛乱、膠州占領〕 魏の青州民の耿翔は衆を聚めて三齊（秦漢の旧名による）を寇掠し、膠州（魏の永安二年に置き、東武城に治し、東武・高密・平昌郡を領す。東武は山東省膠東道諸城県、現・濰坊市諸城市）刺史の裴粲は、専ら高談を事とし、防禦を為さず。夏、四月、翔は州城を掩襲す。左右は賊の至るを白し、粲は曰く、「豈に此の理有らんや！」

左右も又た言う、

「已に州門に入れり」

と、粲は乃ち徐に曰く、

「耿王來たれば、之を聽事に引く可し、自餘の部衆は、且く城民に付せよ。」

翔は之を斬り、首を送りて（梁に）來降す。

● 〔五月〕 魏の東徐州の民の王早等は刺史の崔癢（続は崔庠、庠はまなびや、癢は痒いで文字は違う）を殺し、下邳を以て（梁に）來降す。

● 〔耿翔討伐軍編成〕 六月、壬申（8+60-54+1=1 5 日）、魏は驃騎大將軍の樊子鵠を以て青、膠大使と為し、濟州刺史の蔡俊等を督して耿翔を討たしむ。

● 〔耿翔は梁に亡命〕 秋七月、魏師は青州に至り、翔は城を棄てて（梁に）來奔し、詔して以て兗州刺史と為す。（9-131p）

● 壬辰（38-23+1=1 6 日）、魏は廣陵王の欣を以て大司馬と為し、趙郡王の謐を太師と為す。庚戌（46-23+1=2 4 日）、前司徒の賀拔允を以て太尉と為す。

【宇文泰は魏主を誘い込む】

● 〔宇文泰は高歡を品定め、賀拔岳に魏主取込みを伝授〕 初め、賀拔岳は行台郎の馮景を遣わして晉陽に詣らしめ、丞相の歡は岳の使いの至るを聞きて、甚だ喜び、曰く、

「賀拔公は詎んぞ吾を憶う邪！」

景と血を歃り、約して岳と兄弟と為る。景は還り、岳に言つて曰く、

「歡の奸詐は餘り有り、信ずる可からざる也。」

府の司馬の宇文泰は自ら晉陽に使いし以て歡之人と為りを觀んと請う。歡は其の狀貌を奇として、曰く、

「此の兒は視瞻常に非ず。」

將に之を留めんとし、泰は固く覆命するを求める。歡は既に遣り而して之を悔い、驛を發して急追し、關に至り、及ばず而して返す。泰は長安に至り、岳に謂つて曰く、

「高歡の未だ篡ぜざる所以の者は、正に公の兄弟を憚る耳。侯莫陳悅之徒は、忌む所に非ざる也。公は但だ潜に之が備えを為せ、歡を圖るは難からず。今費也頭（宇文の本姓、破野頭ともいう）の控弦之騎は一萬を下らず、夏州刺史の斛拔彌俄突の勝兵（精銳）は三千餘人、靈州刺史の曹泥、河西の流民の紇豆陵伊利等は各々部衆を擁し、未だ屬する所有らず。公が若し軍を移して隴（隴坂、陝西・甘肅の境の大きい坂）に近づき、其の要害に抗（続は扼）し、之を震うに威を以てし、之を懷くるに惠を以てすれば、其の士馬を収めて以て吾が軍に資すも可なり。西は氐、羌を輯め、北は沙塞（靈夏の塞外は沙漠）を撫し、還りて長安に軍し、魏室を匡輔すれば、此れ桓、文之功也。」

岳は大いに悦び、復た泰を遣わして洛陽に詣りて事を請い、密に其の状を陳せしむ。魏主は喜び、泰に武衛將軍を加え、還り報ぜしむ。

●〔賀拔岳は關西支配、宇文泰を夏州刺史〕八月、帝は岳を以て都督雍、華（魏の泰和 11 年雍州を分けて華州を置き、華山・澄城・白水郡を領す）等二十州諸軍事、雍州刺史と為し、又た心前の血を割き、使者を遣わして繼いで以て之を賜う。岳は遂に兵を引き西（隴に近づく）に平涼に屯し、馬を牧するを以て名と為す。斛拔彌俄突、紇豆陵伊利及び費也頭の万俟受洛干、鐵勒の斛律沙門等は皆な岳に付き、唯だ曹泥は歡に附く。秦、南秦、河、渭四州刺史は同じく平涼に會し、岳の節度を受ける。岳は夏州の被邊の重要（統は要重）なるを以て、良き刺史を求めて以て之に鎮せんと欲し、衆は宇文泰を挙げ、岳は曰く、

「宇文左丞は、吾が左右の手なり、何ぞ廢す可けん也！」

沉吟すること累日にして、卒に表して之を用いる。

●九月、癸酉（9+60-22+1=4 8 日？）、魏の丞相の歡は表して王爵を讓らんとするも、許さず。封邑十萬戸を分かちて勳義（信都より義を起こすに従い、爾朱を討ちて功勳有る者）に頒授せんと請う、之に従う。

■冬、十月、庚申（56-52+1=5 日）、尚書右僕射の何敬容を以て左僕射と為し、吏部尚書の謝舉を右僕射と為す。

●十一月、癸巳（29-21+1=9 日）、魏は殷州刺史の中山の邸珍を以て徐州大都督、東道行台、僕射と為し、以て下邳を討たしむ。

●十二月、丁巳（53-51+1=3 日）、魏主は嵩高に狩す。己巳（5+60-51+1=1 5 日）、溫湯（ただ汝州梁伴有溫泉あるのみ、河南省河洛道臨汝県、現・汝州市）に幸す。丁丑（13+60-51+1=2 3 日）、宮に帰る。（9-132p）

●■〔賀拔勝は梁の襄陽を攻める〕魏の荊州刺史の賀拔勝は雍州（梁の雍州は襄陽に治す）を寇し、下邳戍を抜き、諸蠻を扇動す。雍州刺史の廬陵王の續（蕭衍と丁貴嬪の子、第五子 504-547）は軍を遣わして之を撃ち、屢々敗る所と為り、漢南は震駭す。勝は又た軍を遣わして馮翊、安定、沔陽、鄧城（みな襄陽道に属す）を攻め、皆な之を抜く。續は電威將軍の柳仲禮を遣わして穀城（湖北省襄陽道穀城県、現・襄陽市襄州区）に屯し以て之を拒ましめ、勝は之を攻め、克たず、乃ち還る。是に於いて沔北は蕩して丘墟と為る矣。仲禮は、慶遠之孫也。

●〔高歡は賀拔岳らを警戒して離間の計〕魏の丞相の歡は賀拔岳、侯莫陳悦之強きを患い、右丞の翟嵩は曰く、

「嵩は能く之を間し、其をして自ら相い屠滅せしめん。」

歡は之を遣わす。歡は又た長史の侯景をして紇豆陵伊利を招撫せしむも、伊利は従わず。

高祖武皇帝十二中大通六年（甲寅，534年）

●〔魏主は伊利討伐に異議〕春、正月、壬辰（28-20+1=9 日）、魏の丞相の歡は伊利を河西（五原河の西）に撃ち、之を擒とし、其の部落を河東（五原河の東）に遷す。魏主は之を讓めて曰く、

「伊利は侵さず叛かず、國の純臣為り。王は忽ち之を伐つ、詎んぞ一介の行人の先ず之を請う有り乎！」

●〔泉企は東梁州を平定〕魏の東梁州（金城・直城・安康・魏明郡を領す）民の夷は亂を作す、二月、詔して行東雍州（魏の世祖は東雍州を平陽に置き、太和中罷む。孝昌中に平陽に唐州を置く。唐堯が平陽を都せしを以て、因りて州に名づく。建義の初め改めて晉州と為す。未だ嘗て復た東雍州を置かず）事の豐陽の泉企を以て討ちて之を平げしむ。企は世々商、洛（漢の古県の商県と上洛県）の豪族^た為り、魏の世祖は其の曾祖の景言を以て本縣の令と為し、丹水侯に封じ、其

の子孫をして之を襲^{おそ}わ使む。

●壬戌（58-20+1=29日）、魏は大赦す。

■癸亥（59-20+1=30日）、上は藉田を耕す。大赦す。

●魏の永寧浮圖（148巻天監15年に建つ）は災あり、觀る者は皆な哭し、聲は城闕を振わす。

【賀拔岳殺され、宇文泰立つ】

●〔賀拔岳は侯莫陳悅に謀殺される〕魏の賀拔岳は將に曹泥を討たんとし、都督の武川の趙貴をして夏州に至り宇文泰と之を謀ら使む、泰は曰く、

「曹泥は孤城にして阻遠なり、未だ憂いと為すに足らず。侯莫陳悅は貪し而して信無し、宜しく先ず之を圖るべし。」

岳は聽さず（曹泥は高歡に附く。岳は宇文泰の言に従わず、討を急ぐは、蓋し高歡が伊利を擒とするの役に報いんとするなり。亦忿兵なり）、悦を召して高平に會し、與に共に泥を討つ。悦は既に翟嵩之言を得（高歡の離間の計に同意）、乃ち岳を取らんと謀る。岳は數々悦と宴し語り、長史の武川の雷紹は諫めるも、聽かず。岳は悦をして前に行か使め、河曲（靈州の西に在り、甘肅省寧夏道靈武県、現・臨夏回族自治州銀川市靈武市）に至り、悦は岳を誘いて營に入らしめて坐し、軍事を論じる。悦は陽^{いつわ}りて腹痛と稱して而して起ち、其の婿の元洪景は刀を抜いて岳を斬る。岳の左右は皆な散り走り、悦は人を遣わして之を諭して云わく

「我は別に旨を受け、止だ一人を取るのみ、諸君は怖れる勿かれ。」

衆は以て然りと為し、皆な敢えて動かず。而るに悦の心は猶豫し、即ち撫納せず、乃ち還りて隴に入り、水洛城（甘肅省蘭山道隴西県、現・定西市渭源県）に屯す。岳の衆は散りて平涼に還り、趙貴は悦に詣りて岳の屍を（9-133p）請いて之を葬らんとし、悦は之を許す。岳は既に死し、悦の軍中は皆な相い賀し、行台朗中の薛〔心登〕は私に親する所に謂って曰く、

「悦の才略は素より寡く、輒ち良將を害す、吾が屬は今人の虜と為らん矣、何の賀すること之れ有らん！」

〔心登〕は、真度（139巻齊の明帝建武元年にあり）之從孫也。

●〔岳の衆は宇文泰を推戴〕岳の衆は未だ屬する所有らず、諸將は都督の武川の寇洛の年最長なるを以て、推して諸軍を總べ使む。洛は素より威略無く、衆を齊^{ととの}える能わず、乃ち自ら請いて位を避ける。趙貴は曰く、

「宇文夏州は英略は世に冠たり、遠近は心を歸し、賞罰は嚴明なり、士卒は命を用いる。若し迎え而して之を奉じれば、大事は濟らん矣。」

諸將は或は南に賀拔勝を召さんと欲し、或は東に魏朝に告げんと欲し、猶豫して未だ決せず。都督の盛樂（漢の成樂県、永熙中に盛樂郡を置く、雲中の治所、山西省冀寧道祁県、現・晋中市祁県）の杜朔周は曰く、

「遠水は近火を救わず、今日之事は、宇文夏州に非ざれば能く濟う者無し、趙將軍の議は是也。朔周は請う輕騎にして哀を告げ、且つ之を迎えん。」

衆は乃ち朔周をして馳せて夏州に至り泰を召さ使む。

●〔宇文泰は時を得て行動を決断〕泰は將佐賓客と共に去留を議し、前太中大夫の潁川の韓褒は曰く、

「此れ天授也、又た何をか疑わん乎！侯莫陳悦は、井中の蛙耳、使君往けば、必ず之を擒とせん。」

衆は以為^{いゝ}く、

「悦は水洛に在り、平涼を去ること遠からず、若し已に賀拔公之衆を有すれば、則ち之を圖るは實に難し、願わくは且く留まりて以て變を觀ん。」

泰は曰く、

「悦は既に元帥を害す、自ら應に勢いに乗りて直ちに平涼に據るべし、而して退きて水洛に屯す、吾は其の能く為す無きを知る也。夫れ得難く失い易き者は、時也。若し早く赴かざれば、衆心は將に離れん。」

● 【蔡祐は宇文泰を叱咤激励して彌姐元進を討つ】 夏州の首望（その族は夏州の名族）の都督の彌姐（羌の複姓）

元進は陰に悦に應じんと謀り、泰は之を知り、帳下都督の高平の蔡祐と之を執らんと謀り、祐は曰く

「元進は會^{かなら}ず當に反噬（恩知らず、飼い犬が噛む）すべし、之を殺すに如かず。」

泰は曰く、

「汝は大決（大決心）有り。」

乃ち元進等を召して入りて事を計り、泰は曰く、

「隴賊は逆亂す、當に諸人と力を戮せて之を討つべし、諸人は同ぜざる者有るに似たり、何ぞ也？」

祐は即ち甲を被り刀を持ち直に入り、目を瞋らして諸將に謂って曰く、

「朝に謀りて夕に異なり、何を以て人と為さん！今日は必ず奸人の首を斷たん！」

舉坐は皆な叩頭して曰く、

「願わくは擇ぶ所有れ。」

祐は乃ち元進を叱して、之を斬り、並せて其の黨を誅し、因りて諸將と同盟して悦を討つ。泰は祐に入つて曰く、

「吾は今爾^{なんじ}を以て子と為さん、爾は其の我を以て父と為す乎？」

● 【宇文泰は杜朔周を旧姓に戻す】 泰は帳下の輕騎と馳せて平涼に赴き、杜朔周をして衆を帥いて先ず彈箏峽（甘肅省涇原道平涼県、現・平涼市崆峒区）に據ら令む。時に民間は惶懼し、逃散する者は多し、軍士は争いて之を掠めんと欲し、朔周は曰く、

「宇文公は方に罪を伐ち民を弔（続は討）う、奈何ぞ賊を助けて虐を為す乎！」

撫し而して之を遣り、遠近は悦附す。泰は聞き而して之を嘉^{よみ}す。朔周は本姓は赫連なり、曾祖の庫多汗は難を避けて焉を改める。泰は命じて其の舊姓を復せしめ、之を名づけて達と曰う。

● 【侯景は宇文泰に圧倒される】 丞相の歡は侯景をして岳の衆を招撫せ使め、泰は安定に至り、之に遇い（9-134p）、謂って曰く、

「賀拔公は死すと雖も、宇文泰は尚ほ存す、卿は何為る者！」（胡三省曰く、英雄の姿表と其の举措とは、必ず人に異なる者有り。侯景の狂狡を以て、宇文泰は一語をもてこれを折き、辭氣俱に区ダメ。良に似有るかな。李密が唐の太宗に見え、覚えず驚服する。事亦此に類すと）

景は色を失いて曰く、

「我は猶ほ箭のごとき耳、唯だ人が射る所なり。」

遂に還る（敢えて平涼に至らず）。泰は平涼に至り、岳を哭して甚だ慟し、將士は皆な悲喜す。

● 【高歡は宇文泰の懷柔に失敗】 歡は復た侯景と散騎常侍の代郡の張華原、義寧（建義元年に義寧郡を置き、孤遠城に治し、晋州に属す。山西省冀寧道泌源県）太守の太安（延和二年に太安郡を漢の五原の界に置き、朔州に属す）の王基をして泰を勞わ使め、泰は受けず、劫して之を留めんと欲し、曰く、

「留まれば則ち共に富貴を享けん、然らざれば、命は今日に在り。」

華原は曰く、

「明公は使者を脅すに死亡を以てせんと欲す、此れ華原の懼れる所に非ざる也。」

泰は乃ち之を遣る。基は還り、言わく、

「泰は雄傑なり、請う其の未だ定まらざるに及びて撃ちて之を滅ぼすべし。」

歡は曰く、

「卿は賀拔、侯莫陳は見ざる乎！吾は當に計を以て拱手して之を取るべし。」

●【魏主は岳の郡を宇文泰に統べしむ】魏主は岳の死するを聞き、武衛將軍の元毘を遣わして岳の軍を慰勞し、召して洛陽に還らしめ、並せて侯莫陳悅を召す。毘は平涼に至り、軍中は已に宇文泰を奉じて主と為す。悦は既に丞相の歡に付き、肯えて應召せず。泰は元毘に因りて上表して稱す、

「臣岳は忽ち非命に罹り、都督の寇洛等は臣をして權に軍事を掌ら令む。詔を奉じて岳の軍を召して京に入らしめ、今高歡之衆は已に河東（五原河の東）に至り、侯莫陳悦は猶ほ水洛に在り、士卒は多く是れ西人にして、郷邑を顧戀し、若し逼りて闕に赴か令め、悦は其の後を躡み、歡は其の前を邀えん、恐らくは國を敗り民を殄、損する所は更に甚し。乞う少しく停緩を賜り、徐ろに誘導を事とし、漸く東引に就かん。」

魏主は乃ち泰を以て大都督と為し、即ち岳の軍を統べしむ。

●【李虎は宇文泰に附く】初め、岳は東雍州刺史の李虎を以て左廂大都督と為す。岳死して、虎は荊州に奔り、賀拔勝を説いて岳の衆を収め使め、勝は従わず。虎は宇文泰が岳に代わりて衆を統べるを聞き、乃ち荊州より還りて之に赴く。閿郷（河南省河洛道閿郷県、現・三門峽市靈宝市）に至り、丞相の歡の別將の獲る所と為り、洛陽に送る。魏主は方に關中を取らんと謀り、虎を得て甚だ喜び、衛將軍に拜し、厚く之に賜い、泰に就か使む。虎は、歆（涼王李歆は沮渠蒙遜に滅ぼされる）之玄孫也。

【宇文泰の侯莫陳悦討伐】

●【宇文泰は侯莫陳悦を責める】泰は悦に書を與えて、責めて以わく、

「賀拔公は朝廷に大功有り。君の名は微に行うに薄く、賀拔公は君を薦めて隴右行台と為す。又た高氏は權を専らにするや、君は賀拔公と同じく密旨を受け、屢々盟約を結ぶ。而るに君は國賊に黨附し、共に宗廟を危くし、口血未だ乾かざるに、匕首は已に發す。今吾は君と皆な詔を受けて闕に還る、今日の進退は、唯だ君は是れ視る。君が若し隴を下りて東に邁けば、吾も亦た北道より同じく歸らん（平涼は隴山の北に在り、道を涇州に取り、東して洛に赴くなり）。若し首鼠兩端すれば、吾は則ち日を指して相い見ん（兵を進めて悦を討つを言う）！」

●魏主は泰に秦、隴を安んずる之策を以て問い、泰は表して言らく、

「宜しく悦を召して授けるに内官を以てし、（9-135p）或は處するに瓜、涼（敦煌郡を以て瓜州と為し、武威郡を涼州と為す）の一籩を以てするべし。然らざれば、終に後患と為らん。」

●【宇文泰は侯莫陳悦攻撃】原州（魏の太延二年に高平鎮を置く、正光五年に改めて原州を置き、高平城に治し、高平・長城二郡を領す。甘肅省涇原道固原県、現・固原市原州区）刺史の史歸は、素より賀拔岳の親任する所と為り、河曲之變は、反って悦の為に守る。悦は其の黨の王伯和、成次安を遣わして兵二千を將いて歸を助けて原州に鎮せしめ、泰は都督の侯莫陳崇を遣わして輕騎一千を帥いて之を襲わしむ。崇は夜に乗り十騎を將いて直ちに城下に抵り、餘衆は皆な近路に伏せる。歸は騎の少なきを見、備えを設けず。崇は即ち入り、城門に據り、高平令の隴西の李賢及び弟の遠穆は城中に在り、崇は内應を為す。是に於いて中外鼓噪し、伏兵は悉く起り、遂に歸及び次安、伯和等を擒にして平涼に歸る。泰は崇を表して原州の事を行わしむ。三月、泰は兵を引いて悦を撃ち、原州に至り、衆軍は畢く集まる。

■夏、四月、癸丑（49-49+1=1日）朔、日の之を食する有り。

●〔侯莫陳悦は李弼の忠告を聞かず〕 魏の南秦州刺史の隴西の李弼は侯莫陳悦に説いて曰く、

「賀拔公は罪無く而るに公は之を害す、又た其の衆を撫納せず、今宇文夏州を奉じて以來、聲言は主の為に仇を報し、此れ其の勢いは敵す可からざる也、宜しく兵を解いて之に謝すべし！然らざれば、必ず禍いに及ぶべし。」

悦は従わず。

●〔侯莫陳悦は野に縊死〕 宇文泰は兵を引いて隴に上り、兄の子の導を留めて都督と為し、原州に鎮せしむ。泰の軍令は嚴肅にして、秋毫も犯す無く、百姓は大いに悦ぶ。軍は木狹關（峽に作るべし、甘肅省涇原道固原県の西南、現・固原市原州区、隴山の要衝）に出でても、雪は深く二尺あり、泰は倍道兼行して、其の不意に出る。

悦は之を聞き、退きて略陽を保ち、萬人を留めて水洛（甘肅省涇原道靜寧県、現・平涼市靜寧県 or 庄浪県）を守る。

泰は至り、水洛は即ち降る。泰は輕騎數百を遣わして略陽（晉の武帝は天水を分けて略陽郡を置く。甘肅省渭川道秦安県の東北、現・天水市秦安県隴城鎮）に趣かしめ、悦は退いて上邽を保ち、李弼を召して之と與に泰を拒む。弼は悦が必ず敗れるを知り、陰に遣使して泰に詣らしめ、内應を為さんと請う。悦は州城を棄て、南して山險を保ち、弼は所部に謂って曰く、

「侯莫陳公は秦州（上邽城）に還らんと欲す、汝が輩は何ぞ裝束せざるや！」

弼の妻は、悦之姨也、衆は咸な之を信じ、争いて上邽に趣く。弼は先ず城門に據り以て之を安集し、遂に城を舉げて泰に降り、泰は即ち弼を以て秦州刺史と為す。其の夜、悦は軍を出して將に戦わんとし、軍は自ら驚きて潰える。悦の性は猜忌、既に敗れ、左右の己に近づくを聴さず、其の二弟並びに子及び岳を謀殺する者七八人と軍を棄てて迸走する。數日之中に、槃桓往來し、趣く所を知らず。左右は靈州に向かい、曹泥に依るを勧め、悦は之に従う。自ら騾に乗り、左右をして皆な歩從せ令め、山中より靈州に趣かんと欲す。宇文泰は原州都督の賀拔穎をして之を追わ使め、悦は追騎を望見し、野に縊死す。

●〔宇文泰は秋毫も取らず〕 泰は上邽に入り、薛[心登]を引きて記室參軍と為す。悦の府庫を収めるに、財物は山積す、泰は秋毫も取らず、皆な以て士卒を賞す。左右は一銀甕を竊みて以て歸り、泰は知り而して之を罪し、即ち剖きて將士に賜う。

●〔幽州刺史孫定兒を討伐〕 悦の黨の幽州（陝西省咸陽市北部）刺史の孫定兒は州に據りて下らず、衆數萬有り、泰は都督の中山の劉亮を（9-136p）遣わして之を襲わしむ。定兒は大軍の遠きを以て、備えを為さず。

亮は先ず一纛（^{とう}高い地位の印、軍の本陣の印、はたほこ）を城に近き高嶺に豎て、自ら二十騎を將いて馳せて城に入る。定兒は方に酒を置き、衆は猝に亮の至るを見、駭愕し、為す所を知らず、亮は兵を麾いて定兒を斬り、遙に城外の纛を指さし、二騎に命じて曰く、

「出でて大軍を召せ！」

城中は皆な懾服し、敢えて動く莫し。

●〔氏王の楊紹先の自立失敗〕 是より先、故の氏王の楊紹先は魏の亂れるに乗りて逃げて（146 卷天監五年に魏に捕えられる）武興に歸り、復た王を稱す。涼州刺史の李叔仁は其の民の執る所と為り、氏、羌、吐谷渾は所在に蜂起す、南岐より瓜、鄯に至るまで、州を跨り郡に據る者は勝げて數える可からず。宇文泰は李弼をして原州に鎮ぜ令め、夏州刺史の拔也惡蚝をして南秦州に鎮せしめ、渭州刺史の可朱渾道元を渭州に鎮せしめ、衛將軍の趙貴を秦州の事を行わしめ、幽、涇、東秦、岐四州之粟を征して以て軍に給す。楊紹

先は懼れ、稱籓し、妻子を送りて質と為す。

【於謹の策で宇文泰は魏主を誘う】

● 【於謹と高歡の謀略戦】 夏州長史の於謹は泰に謂って曰く、(胡三省曰く、於謹は兵中に間關すること年有り。今乃ち宇文氏に遇い、卒に功名を以て自ら見わる。豈に所謂己を知る者か、抑も際遇自ら時有るか。然れども謹は廣陽王深に事えるや、陳ずる所の策畫、時に随いて變を設けるに過ぎず。今宇文泰に事えては、則ちこれを勉めるに、天子を迎えて興王の業を成すを以てす。蓋し宇文泰の才は以て為す有るに足るを知ればなり。所謂量りて而る後居るなりと)

「明公は關中の險固之地に據り、將士は驍勇に、土地は膏腴(地味が肥える)なり。今天子^①は洛に在り、群凶に迫られ、若し明公之懇誠を陳べ、時事之利害を算し、關右に都せんを請い、天子を挟みて以て諸侯に令し、王命を奉じて以て暴亂を討てば、此れ桓、文之業にして、千載の一時也！」

泰は之を善しとす。丞相の歡は泰が秦、隴を定めるを聞き、遣使して甘言厚禮して以て之を結び、泰は受けず、其の書を封じ、都督濟北の張軌をして魏主に獻ぜ使む。斛斯椿は軌に問いて曰く、

「高歡の逆謀は、行路皆な之を知る。人情の恃む所は、唯だ西方に在り、未だ宇文の賀拔に何如を知らず！」(泰の才は賀拔岳に比べて如何と成す)

軌は曰く、

「宇文公は文は經國に足り、武は能く亂を定める。」

椿は曰く、

「誠に君の言の如くならば、真に恃む可き也。」

● 【魏主は宇文泰に關西人事権を与える】 魏主は泰に命じて二千騎を發して東雍州(華州の鄭県に置く、陝西省關中道華県、現・渭南市華州区)に鎮せしめ、助けて勢援と為し、仍って泰に命じて稍く軍を引き而して東せしむ。泰は大都督の武川の梁御を以て雍州刺史と為し、歩騎五千を將いて前行せ使む。是より先、丞相の歡は其の都督の太安の韓軌を遣わして兵一萬を將いて蒲板に據りて以て侯莫陳悦を救わしめ、凝州刺史の賈顯度は舟を以て之を迎える。梁御は顯度を見、説きて泰に従わ使む。顯度は即ち出でて御を迎え、御は入りて長安に據る。魏主は泰を以て侍中、驃騎大將軍、開府儀同三司、關西大都督、略陽縣公と為し、製を承けて封拜せしむ。泰は乃ち寇洛を以て涇州刺史と為し、李弼を秦州刺史と為し、前略陽太守の張獻を南岐州刺史と為す。南岐州刺史の盧待伯は代を受けず、泰は輕騎を遣わして襲い而して之を擒とす。

● 【洛陽の高歡一党は驅逐】 侍中の封隆之は丞相の歡に謂って曰く、

「斛斯椿等は今京師に在り、必ず禍亂を構えん。」

隆之は僕射の孫騰と魏主の妹の平原公主を尚するを爭い、(9-137p) 公主は隆之に歸し、騰は其の言を椿に洩らし、椿は以て帝に白す。隆之は懼れ、逃げて郷里に還り、歡は隆之を召して晉陽に詣らしむ。會々騰は仗を帶びて省に入り、^{ほしいまま}擅に御史を殺し、罪を懼れ、亦た逃げて歡に就く。領軍の婁昭は疾と辭して晉陽に歸る(ここで高歡の一党は洛陽にある者無し、帝を制御できず)。帝は斛斯椿を以て領軍を兼ねしめ、改めて都督及び河南、關西の諸刺史を置く。華山王の鷲(元鷲、473-541)は徐州に在り、歡は大都督の邸珍(去年高歡は邸珍をして徐州を督して下邳を討たしむ、因りて其の城を奪う)をして其の管鑰を奪わ使む。建州刺史の韓賢、濟州刺史の蔡俊は、皆な歡の黨也。帝は建州を省き(胡三省曰く、建州は太行の路に當り、晉陽より洛に入るの要道なり。州を省き賢を去るは、特に歡の黨を銷するのみならず、亦、歡の南道の主人を去るなりと)以て賢を去り、御史をして俊の罪を舉げ使め、汝陽王の叔昭を以て之に代わら使む。歡は上言す、

「俊の勳は重し、解奪す可からず。汝陽は懿德あり、當に大籓を受けるべし。臣の弟の永寶は、猥りに定州に任ず、宜しく賢路を避くべし。」

帝は聽かず。

●〔親衛隊強化〕 五月、丙戌（22-18+1=5日、丙子×）、魏主は勳府・庶子・廂別（皆宿衛）六百人を増置す。又た騎官、廂別二百人を増す。（みな宿衛の親衛隊のようなもの）

●〔梁を伐つと称して閱兵式〕 魏主は晉陽（高歡が居る所）を伐たんと欲し、辛卯（27-12+1=16日）、下詔して戒嚴し、雲わく、
「自ら將して梁を伐たんと欲す。」

河南の諸州の兵を發し、大いに洛陽に閱し、南に洛水に臨み、北に邙山に際し、帝は戎服して斛斯椿と臨みて之を觀る。

●〔魏主と高歡の一触即発〕 六月、丁巳（53-48+1=6日）、魏主は密に丞相の歡に詔して、稱す
「宇文黑獺（宇文泰の字）、賀拔勝は頗る異志有り、故に南伐と假稱し、潛に之が備えを為す。王も亦た宜しく共に形援を為すべし。讀み訖わりては之を燔け。」

歡は表して以為く、

「荆（賀拔勝）、雍（宇文泰）は將に逆謀有り、臣は今潛に兵馬三萬を勒し、河東より渡らしめ、又た恆州刺史の庫狄乾等を遣わして兵四萬を將して來遼津（恆州より來遼津を渡る、其の地は平城の西にあるべし、河津の要なり、夏州に至る）より渡らしめ、領軍將軍の婁昭等をして兵五萬を將して以て荊州を討たしめ、冀州刺史の尉景等をして山東の兵五萬、突騎五萬を將して以て江左を討たしめ、皆な所部を勒し、伏して處分を聽く。」

帝は歡が其の變を覺ると知り、乃ち歡の表を出し、群臣をして之を議せ令め、歡の軍を止めんと欲す。歡も亦た并州（大丞相府を并州に置く）の僚佐を集めて共に議し、還りて以て表聞し、仍って云わく、

「臣は嬖佞の間する所と為り、陛下は一旦疑いを賜わる。臣が若し敢えて陛下に負けば、身をして天殃を受け、子孫をして殄絶せ使めん。陛下が若し赤心を垂信し、干戈をして動かさざら使めば、佞臣一二人願わくは斟量（酌量、斟は汲む、量は計るの意味）廢出（廢黜とすべし）すべし。」

●〔魏主の高歡への言い訳〕 丁卯（3+60-48+1=16日）、帝は大都督の源子恭をして陽胡（陽壺城、邵郡白水県にあり、山西省河東道垣曲県、現・運城市垣曲県）を守らしめ、汝陽王の暹をして石濟を守らしめ、又た儀同三司の賈顯智を以て濟州刺史と為し、豫州刺史の斛斯元壽を帥いて東に濟州に趣かしむ。元壽は、椿之弟也。蔡俊は代を受けず、帝は愈々怒り、辛未（7+60-48+1=20日）、帝は復た洛中の文武の議意を録し以て歡に答え、且つ舍人の溫子升をして敕を為りて歡に賜わ使めて曰く、

「朕は尺刃を勞せず、坐して天子と為り、所謂我を生む者は父母なり（9-138p）、我を貴ぶ者は高王なり。今若し事無きに王に背き、相い攻討するを規れば、則ち身及び子孫をして、還って王の誓いの如くなら使めん。近ごろ宇文が亂を為し、賀拔が之に應じるを慮れば、故に戒嚴し、王と俱に聲援を為さんと欲す。今其の為す所を觀れば、更に異跡無し。東南賓せざること、日為るは已に久しく、今天下の戸口は減半し、未だ宜しく兵を窮め武を極むべし。朕は既に闇昧にして、佞人の誰為るかを知らず。頃高乾之死するは、豈に獨り朕の意ならんや！王は忽ち昂に對し兄は枉死すると言う、人之耳目は何ぞ輕んず可きこと易からんや！聞くが如く、庫狄干は王に語りて云わく『本懦弱なる者を取りて王と為さんと欲す、此の長君を立てるを事とする無し、其をして駕御す可からざら使む。今但だ十五日行を作せば、自ら之を廢し、更に餘者を立つ可からん。』此の如き議論は、自ら是れ王が勳人を問す、豈に佞臣之口に出でんや！去歲は封隆之叛し、今年は孫騰は逃げ去る、罪せず送らず、誰か王を怪しまざらん！王が若し君に事えるに誠を盡

くせば、何ぞ二首を斬送せざるや！王は啟して『西に去る』と云うと雖も、而も四道は俱に進み、或は南して洛陽に度らんと欲し、或は東に江左に臨まんと欲し、之を言う者は猶ほ應に自ら怪しむべし、之を聞く者は寧んぞ能く疑わざらんや！王が若し晏然として北に居れば、此に在るもの百萬之衆有りと雖も、終に彼を圖る之心無からん。王が若し旗を擧げて南を指せば、縦え匹馬只輪無くとも、猶ほ空拳を奮い而して死を爭わんと欲す。朕は本々寡德にして、王は已に之を立つ。百姓は無知にして、或は實に可なりと謂う。若し他人の圖る所と為れば、則ち朕之惡を彰わさん。假令還りて王に殺さると為れば、幽辱齷粉するとも、了するに遺恨無し！本は君臣一體にして、符契を合せるが若くならんを望む、圖らざり今日分疏（仲違い）すること此に至るとは！」

● 〔王思政は魏主に關中行幸を進言〕 中軍將軍の王思政は魏主に言つて曰く、

「高歡之心は、昭然として知る可し。洛陽は武を用いる之地に非ず、宇文泰は乃ち王室に心あり、今往きて之に就き、還りて舊京を復せば、何ぞ克たざるを慮からん？」

帝は深く之を然りとし、散騎侍郎の河東の柳慶を遣わして泰に高平に見え、共に時事を論ぜしむ。泰は輿駕を奉迎せんと請い、慶は覆命す。帝は復た私に慶に謂つて曰く、

「朕は荊州に向かわんと欲す、何如や？」

慶は曰く、

「關中の形勝にして、宇文泰の才略は依る可し。荊州の地は要害に非ず、南に梁寇迫り、臣愚は、未だ其の可なるを見ず。」

帝も又た閹内都督（南北朝には皆直閹將軍有り、魏は亦閹内都督を置く）の宇文顯和に問い、顯和も亦た帝に西に幸するを勧める。時に帝は廣く州郡の兵を徴し、東郡太守の河東の裴俠は所部を帥いて洛陽に詣り、王思政は問いて曰く、

「今權臣は命を擅にし、王室は日々に卑し、奈何せんや？」

俠は曰く、

「宇文泰は（9-139p）三軍の推す所と為り、百二之地（要害險固の地。漢書に他肯曰く、秦は形勝の國なり、河を帯び山を阻とし、持戟百萬、秦は百二を得ると。秦の地險固にして二萬人、諸侯の百萬人に當るに足るなり）に居り、所謂己に戈矛を操り、寧ぞ肯えて人に授けるに柄を以てせん！之に投ぜんと欲すと雖も、恐らくは湯を避けて火に入るに異なる無からん也。」

思政は曰く、

「然らば則ち如何而して可なるや？」

俠は曰く、

「歡を圖るに立ちどころに至る之憂有り、西に巡りては將來之慮り有り。且く關右に至り、徐に其の宜を思わん耳。」

思政は之を然りとし、乃ち俠を帝に進め、左中郎將を授ける。

● 〔魏主は高歡の鄴遷都を阻止〕 初め、丞相の歡は洛陽の久しく喪亂を経るを以て、鄴に遷都せんと欲し、帝は曰く、

「高祖は鼎を河、洛に定め、萬世之基を為す。王は既に功は社稷に存し、宜しく太和の舊事に遵うべし。」

歡は乃ち止む。是に至りて復た遷都を謀り、三千騎を遣わして建興（慕容永は上黨を分けて建興郡を置く。魏は建州と為す。山西省冀寧道南部）に鎮せしめ、河東及び濟州の兵を益し、諸州の和糴（民間の米を買い入れる事。和糴して軍食に充てるはここに始まる）粟を擁し、悉く運びて鄴城に入る。帝は又た歡に敕して曰く、

「王が若し人情を厭伏し、物議を杜絶せんとすれば、唯だ河東之兵を歸し、建興之戍を罷め、相州（鄴に治す）之粟を送り、濟州之軍を追い、**蔡俊**をして代を受け使め、**邸珍**をして徐に出で、戈を止め馬を散じ、各々家業を事とする有り。脱し糧廩（兵糧の蔵庫）を須^{もち}いんには、別に遣（続には無し）わして轉輸せしめれば。則ち讒人は舌を結び、疑悔（疑いや悔い）は生じず、王は太原に高枕し、朕は京洛に垂拱せん矣。王が若し馬首南に向かい、鼎の輕重を問えば、朕は武ならずと雖も、社稷宗廟之計を為し、止まんと欲すとも能わず。決するは王に在り、朕が能く定むる所に非ず、山を為りて簣を止める（書經の旅獒に曰く、山を為りて九仞の功を一簣に虧くと。論語の子罕篇に孔子曰く、譬えば山ほ為るが如し、未だ成らざること一簣にして止むは吾止むなりと）は、相い為に之を惜しむ。」

歡は上表して宇文泰、斛斯椿の罪惡を極言す。

● 【帝と高歡に揺らぐ賀拔勝】 帝は廣寧太守の廣寧（郡は朔州に属し、石門・中川の二県を領す、山西省冀寧道沁水県、現・晋城市沁水県）の任祥を以て尚書左僕射を兼ね、開府儀同三司を加える。祥は官を棄てて走り、河を度り、郡に據りて歡を待つ。帝は乃ち文武官の北來の者に敕して其の去留に任せ、遂に制書を下して歡の咎惡を數え、賀拔勝を召して行在所に赴かしむ。勝は以て太保掾の范陽の盧柔に問う、柔は曰く、

「高歡は悖逆なり、公は席捲して都に赴き、與に勝負を決し、死生之を以てするは、上策也。北は魯陽を阻とし、南に舊楚（江陵は舊楚の郢都はその界内に在り）を並せ、東に兗、豫に連なり、西に關中を引き、帶甲は百萬、鬬を觀而して動くは、中策也。三荆之地を擧げて、身を梁に庇えば、功名は皆な去るは、下策也（胡三省曰く、賀拔勝は既に王を勤める能わず、又界を保つ能わず、身を挺して梁に奔り、卒に盧柔の料る所の如し。勝の心を原ねるに、柔が書生なるを以て、故に其の言を易んじ、殊えて知らず、博く往迹を觀、默して事変を察し、以て坐して勝敗を論じるは、則ち書生の身、固に武夫健將の能く及ぶ所に非ざることと）。」

勝は笑い而して應えず。

【魏主の長安への逃亡】

● 【帝は宇文泰に迎えるを求める】 帝は宇文泰を以て尚書僕射を兼ねしめ、關西大行台と為し、妻わずに馮翊長公主を以てするを許し、泰の帳内都督の秦郡（魏收地形志には、魏に秦郡無し。五代志に曰く、扶風雍県に後魏は秦平郡を置く。又秦州醴泉県は後魏は寧夷と曰い、西魏は寧夷郡を置く、後周改めて秦郡と曰うと）の楊薦（続は楊荐）に謂つて曰く、（9-140p）

「卿は歸りて行台に語れ、騎を遣わして我を迎えよ。」

薦を以て直閣將軍と為す。泰は前秦州刺史の駱超を以て大都督と為し、輕騎一千を將して洛に赴かしめ、又た薦を遣わして長史の宇文測と關を出でて（魏主を）候接せしむ。

● 【高歡と宇文泰は共に出陣】 丞相の歡は其の弟の定州刺史の琛を召して晉陽を守ら使め、長史の崔暹に命じて之を佐けしむ。暹は、挺之族孫也。歡は兵を勒して南に出で、其の衆に告げて曰く、

「孤は爾朱が命を擅にするを以て、大義を海内に建て（事は前卷四年にあり）、主上を奉戴し、誠は幽明を貫く。横しまに斛斯椿の讒構と為り、忠を以て逆と為され、今者南に邁^もくは、椿を誅し而して已む。」

高敖曹を以て前鋒と為す。宇文泰も亦た檄を州郡に移し、歡の罪惡を數え、自ら大軍を將いて高平を發し、前軍は弘農に屯す。賀拔勝は汝水に軍す（魯陽に出でて襄陽の界に屯巢、僅かに境を越えて止まるのみ）。

● 【魏主は河橋に屯す】 秋、七月、己丑（25-17+1=9日）、魏主は親ら兵十餘萬を勒して河橋に屯し、斛斯椿を以て前驅と為し、邙山之北に陳す。椿は精騎二千を帥い夜河を度り其の勞弊を掩わんと請い、帝は始め之を然りとす。黃門侍郎の楊寬は帝に説いて曰く、

「**高歡**は臣を以て君を伐つ、何の至らざらん所あらん！今兵を人に假せば、恐らくは它變を生じん。**椿**が若し河を度り、萬一功有れば、是れ一の**高歡**を滅ぼして、一の**高歡**を生むなり矣。」

帝は遂に**椿**に敕して行くを停める、**椿**は歎いて曰く、

「頃このごろ 熒惑（晉の天文志に曰く、南斗の六星は天廟なり、將に天子の事有らんとするは、斗に占す。熒惑の副星はこれに入るは、天子がその位に安んぜず。後の所謂天子、殿を下りて去る、是れなりと）は南斗に入り、今上は左右の間構を信じ、吾が計を用いず、豈に天道なる乎！」

宇文泰は是を聞き、左右に謂って曰く、

「**高歡**は數日行くこと八九百里、此れ兵家の忌む所なり、當に便に乗じて之を撃つべし。而るに主上は萬乗之重きを以て、河を度りて決戦する能わず、方に津に緣りて據守す。且つ長河萬里、捍御すること難しと為す。若し一處度を得れば、大事は去るなり矣。」

即ち大都督の**趙貴**を以て別道行台（別道にて**高歡**の後に擬せんと欲す）と為し、蒲板より濟り、并州に趣かしめ、大都督の**李賢**を遣わして精騎一千を將いて洛陽に赴かしむ（魏主の出迎え）。

●**〔魏主と高歡の戦鬪開始〕**帝は**斛斯椿**をして行台の**長孫稚**、大都督の**潁川の王斌之**と虎牢に鎮せしめ、行台の**長孫子彦**を陝に鎮せしめ、**賈顯智**、**斛斯元壽**を滑台に鎮せしむ。**斌之**は、**鑒**（150 卷普通五年にあり）之弟、**子彦**は、**稚**之子也。**歡**は相州刺史の**竇泰**をして滑台に趣かしめ、建州刺史の**韓賢**を石濟に趣かしむ。

竇泰は**顯智**と**長壽津**（察哈爾興和道涼城県東北に在り。水經注に河水右して滑台城を逕、又東北して涼城県を逕、又東北して長壽津と為ると、ウランチャブ市涼城県）に遇い、**顯智**は陰に**歡**に降るを約し、軍を引いて退く。軍司の**元玄**は之を覺り、馳せ還り、師を益すを請い、帝は大都督の**侯鯁紹**を遣わして之に赴かしめ、滑台の東に戦い、**顯智**は軍を以て降り、**紹**は戦死す。北中郎將の**田怙**は**歡**の内應を為す、**歡**は軍を潜めて野王（河南省河北道泌陽県。五代志に河内郡は河内内に治す、旧野王という、現・焦作市沁陽市）に至り、帝は之を知り、**怙**を斬る。**歡**は河北十餘里（野王より兵を進め河を渡り纔に十餘里）に至り、再び遣使して口づからに誠款を申べしむ。帝は報ぜず。丙午（42-17+1=26日）、**歡**は軍を引いて河を度る。（9-141p）

●**〔魏主は洛陽を出奔、飲まず食わず〕**魏主は計を群臣に問い、或は梁に奔らんと欲し、或は南に**賀拔勝**に依るを雲い、或は西に關中に就くを雲い、或は洛口（洛水の黄河に入る所、河南省河洛道鞏県、現・鄭州市鞏義市）を守りて死戦するを雲い、計は未だ決せず。**元斌之**は**斛斯椿**と權を爭い、**椿**を棄てて還り、帝を給きて云わく、

「**高歡**の兵は已に至る！」

丁未（43-17+1=27日）、帝は遣使して**椿**を召して還らしめ、遂に南陽王の**竇炬**、清河王の**但**、廣陽王の**湛**を帥い五千騎を以て瀘西てんせい（現・河南省洛陽市瀘河回族區瀘西街道）の南陽王の別捨に宿し、沙門の**惠臻**は璽を負い千牛刀を持して以て従う。衆は帝の將に西に出でんとするを知り、其の夜、亡げる者は過半なり、**但**、**湛**も亦た逃げ歸る。**湛**は、**深**（廣陽王**深**は葛榮に殺される）之子也。武衛將軍の雲中の**獨孤信**は單騎にして帝を追ひ、帝は歎じて曰く、

「將軍は父母を辭し、妻子を捐て而して來る、『世亂れて忠臣を識る』とは、豈に虚言ならん也！」

戊申（44-17+1=28日）、帝は西に長安に奔り、**李賢**は帝に崤（陝に三崤の山有り。魏の太和11年に崤県を置き、恒農郡に属す。河南省河洛道陝県、現・三門峽市陝州区）中に遇う。己酉（45-17+1=29日）、**歡**は洛陽に入り、永寧寺に捨し、領軍の**婁昭**等を遣わして帝を追わしめ、帝に東に還るを請う。**長孫子彦**は陝を守る能わず、城を棄てて走る。**高敖曹**は勁騎を帥いて帝を追ひ陝西（陝城に西）に至り、及ばず。帝は馬に鞭ちて長驚ちやうぶし、糗漿きゅうしょう（糗は米麦を熬りて作る、漿は飲み物）乏絶し、三二日の間、從官は唯だ澗水を飲む。湖城（河南省河洛道閿郷県の北、

現・三門峡市靈宝市)に至り、**王思村**の民有り麥飯壺漿を以て**帝**に獻じ、**帝**は悦び、一村を復(租税免除か)すること十年。稠桑(湖城の西)に至る、潼關大都督の**毛鴻賓**は迎えて酒食を獻じ、從官は始めて飢渴を解く。

●**〔高歡は洛陽に入り高官誅殺〕****八月**、甲寅(50-47+1=4日)、丞相の**歡**は百官を集めて謂って曰く、「臣と為りては主を奉じ、危亂を匡救す、若し處りて諫争せず、出でて陪從せざれば、緩なれば則ち寵に耽り榮を爭い、急なれば則ち之を委てて逃竄すれば、臣の節は安くに在るや！」
衆は對える能う莫し、兼尚書左僕射の**辛雄**は曰く、

「**主上**は近習と事を圖り、**雄**等は預め聞くを得ず。乘輿の西に幸するに及び、若し即ち追隨すれば、跡は佞黨に同じからんを恐れる。留まりて**大王**を待ち、又た從わざるを以て責めを蒙る、**雄**等の進退は罪を逃げる所無し。」

歡は曰く、

「卿等は位は大臣に備わり、當に身を以て國に報いるべし。群佞は事を用い、卿等は嘗て一言の諫争する有り乎！國家之事をして一朝此に至ら使むは、罪は何くに歸せんと欲するや！」

乃ち**雄**及び開府儀同三司の**叱列延慶**、兼吏部尚書の**崔孝芬**、都官尚書の**劉廐**、兼度支尚書の天水の**楊機**、散騎常侍の**元士弼**を収めて、皆な之を殺す。(胡三省曰く、高歡が**辛雄**等を責めるに積みを以てしてこれを殺すは、亦以て魏朝の望を去り、將に以て其の私党を樹てんとするのみと)**孝芬**の子の司徒從事中朗の**猷**は間行して關に入り、**魏主**は本官を以て門下の事(凡そ門下を経る者は之をして聞奏せしむるなり)を奏せ使む。**歡**は司徒の清河王の**但**を推して大司馬と為し、製を承けて事を決し、尚書省に居らしむ。

【西魏の成立】

●**〔魏主の長安入場〕**宇文**泰**は**趙貴**、**梁御**をして甲騎二千を帥いて奉迎せ使め、**帝**は河に循いて西行し、**御**に謂って曰く、

「此の水は東流し、而るに**朕**は西上す。若し復た洛陽を見、親ら陵廟に詣るを得れば、卿等の功也。」

帝及び左右は皆な流涕す。**泰**は儀衛を備えて帝を迎え、(9-142p)東陽驛(長安の東北の駅。水經注に渭水は長安城の北を過ぎ、又東して新豐の東を過ぎ、西陽水に合す。二水並び手南して廣鄉原に出づと)にて謁見し、冠を免ぎて流涕して曰く、

「臣は式^もって寇虐^{とど}を遏める(詩經に曰く、式^もって寇虐^{とど}を遏め、慝^{とど}を作さしむる無しと)能わず、乘輿をして播遷せ使むは、臣之罪也。」

帝は曰く、

「公之忠節は、遐邇(遠近みな)に著わる。**朕**は不徳を以て、負乘(徳無くして上位に居る。易經に曰く、負い且つ乗る、寇の至るを致す。負うは小人の事なり、乗るは君子の器なり。小人にして君子の器に乗る。盜はこれを奪わんことを思うと)して寇を致す、今日相い見るは、深く厚顔(鄭玄曰く、顔の厚き者は、人に慚じるを知らずと)を用いる。方に社稷を以て公に委ね、公は其れ之を勉めよ！」

將士は皆な萬歳と呼ぶ。遂に長安に入り、雍州の廨捨(官舎)を以て宮と為し、大赦す。**泰**を以て大將軍、雍州刺史と為し、尚書令を兼ねしむ。軍國之政は、咸な決を取る焉。別に二尚書を置き、機事を分掌せしめ、行台尚書(尚×)の**毛遐**、**周惠達**を以て之と為す。時に軍國は草創にして、二人は糧儲を積み、器械を治め、士馬を簡び、魏朝は之を賴る。**泰**は**馮翊長公主**に尚し、駙馬都尉(漢の武帝は奉事・駙馬・騎の三都尉を置く。魏晉以来、公主に尚する者は例として駙馬都尉を拜す)を拜す。

■**〔蕭衍は虜も亦た天象に應じると〕**是より先、熒惑は南斗に入り、去り而して復た還り、留止すること

六旬。上は諺に

「熒惑南斗に入れば、天子は殿を下りて走る」

と云うを以て、乃ち跣^{はだし}に而して殿を下り以て之を禳^{はら}う。魏主の西に奔るを聞くに及び、慚じて曰く、「虜も亦た天象に應じる邪！」

■ 〔梁は仇池を優遇〕 己未（55-47+1=9日）、武興王の楊紹先を秦、南秦二州刺史と為す。

〔東魏〕 〔高歡は清河王の但を即位させ、華陰に進出〕 辛酉（57-47+1=11日）、魏の丞相の歡は自ら追いて魏主を迎える。戊辰（4+60-47+1=18日）、清河王の但は制を下して大赦す。歡は弘農に至り、九月、癸巳（29-17+1=13日）、行台僕射の元子思をして侍官を帥いて帝を迎え使む。己酉（45-17+1=29日）、潼關を攻め、之に克ち、毛鴻賓を擒とし、進みて華陰の長城（戦国時代に魏が長城を築き、鄭より洛に濱する者なり）に屯し、龍門（華山郡夏陽県、陝西省關中道韓城県の龍門山有り、渭南市韓城市）都督の薛崇禮は城を以て歡に降る。

● 〔賀拔勝の躊躇〕 賀拔勝は長史の元穎をして荊州事を行わしめ、南陽を守り、自ら所部を帥いて西に關中に赴く。淅陽（河南省汝陽道内郷県、現・南陽市内郷県）に至り、歡が已に華陰に屯するを聞き、還らんと欲し、行台左丞の崔謙は曰く、

「今帝室は顛覆し、主上は蒙塵す、公は宜しく倍道兼行して、行在に朝し、然る後に宇文行台と同心して力を戮せ、大義を唱擧すべし、天下は孰か風を望みて響應せざらんや！今此を捨て而して退けば、恐らくは人人は解體せん、一たび事機を失えば、後悔は何ぞ及ばん！」

勝は用いる能わず、遂に還る。

● 歡は退きて河東に屯し、行台尚書長史の薛瑜をして潼關を守らしめ、大都督の庫狄溫をして封陵を守らしめ、蒲津（黄河の津渡の處、山西省河東道永濟県の西、現・運城市永濟市）の西岸に築城し、薛紹宗を以て華州刺史と為し、之を守らしめ、高敖曹を以て豫州の事を行わしむ。

〔東魏〕 ● ■ 〔侯景は荊州に進出し賀拔勝を追う〕 歡は晉陽を發してより、是に至るまで凡そ四十たび啟し、魏主は皆な報ぜず。歡は乃ち東に還り、行台の侯景等を遣わして兵を引いて荊州に向かわしめ、荊州民の鄧誕等は元穎を執りて以て景に應じる。賀拔勝は至り、景は逆えて之を撃ち、勝の兵は敗れ、數百騎を帥いて來奔（梁に亡命、資治通鑑は梁を以て正統と為す故）す。

〔東魏〕 ● 〔趙剛は馮景昭に決断を迫る〕 魏主之洛陽に在る也、密に閭内都督の河南の趙剛を遣わして（9-143p）東荊州刺史の馮景昭を召して兵を帥いて入援せしめ、兵は未だ發するに及ばず、魏主は西に關に入る。景昭は府中の文武を集めて従う所を議し、司馬の馮道和は州に據りて北方の處分（高歡の趨勢）を待つを請う。剛は曰く、

「公は宜しく兵を勅して行在所に赴くべし。」

之久しく、更に言う者無し。剛は刀を抽きて地に投げて曰く、

「公が若し忠臣と為るを欲するならば、請う道和を斬れ。如し賊に従わんと欲するならば、（自分を）速かに殺さる可し！」

景昭は感悟し、即ち衆を帥いて關中に赴く。侯景は兵を引いて（元穎を攻める事）穰城に逼り、東荊州民の楊祖歡等は兵を起こして之に應じ、其の衆を以て景昭を路に邀え、景昭は戦いて敗れ、剛は蠻中（魏の東荊州は蠻左にあり）に没す。

〔東魏〕 ● 〔東魏孝靜帝の即位〕 冬、十月、丞相の歡は洛陽に至り、又た僧道榮を遣わして表を孝武帝に奉じて曰く、

「陛下が若し遠く一制を賜い、京洛に還るを許せば、臣は當に文武を帥勅し、式って宮禁を清めん。若し

返正すること日無ければ、則ち七廟は主無かる可からず、萬國は須く歸する所有るべし、臣は寧ろ陛下に負くとも、社稷に負かず。」

帝は亦た答えず。歡は乃ち百官耆老を集め、所立つ所を議す。時の清河王の但の出入は已に警蹕と稱し、歡は之を丑（続は醜）とし、乃ち托するに以わく、

「孝昌以來、昭穆は序を失い、永安には孝文を以て伯考と為し、永熙には孝明を夾室に遷す、業喪い祚短かきは、職として此に之に由る。」（敬宗は父の澎城王勰を以て皇帝と為し、七廟に列し、孝文を伯考と為しと為す。高歡が魏の孝武帝を立てるや、永熙とかいげんしす。孝武帝自ら孝明帝に於いて兄弟なるを以て、禮に兄弟相共に廟に入らず、遂に孝明帝の主を夾室に遷す。凡そ宗廟の制は東西夾室有り）

遂に清河王の世子の善見（高歡はおもえらく、善見は清河王懌の孫にして孝明帝の猶子なり、入りて大宗を継ぐには昭穆が順なりと）を立てて帝と為し、但に謂って曰く、

「王を立てんと欲するは、王之子を立てるに如かず。」

但は自ら安ぜず、輕騎にして南に走り、歡は追いて之を還す。丙寅（2+60-46+1=1 7 日）、孝靜帝は（洛陽）城の東北に即位す（ここより東魏興る、単に魏主という場合は西魏なり）、時に年は十一。大赦し、改元して天平とす。

【高歡と宇文泰のせめぎあい】

●**東魏** **宇文泰は反撃** 魏の宇文泰は進軍して潼關を攻め、薛瑜を斬り、其の卒七千人を虜として、長安に還り、位を進めて大丞相とす。東魏の行台の薛修義等は河を度りて楊氏壁（龍門の西岸にあり、華陰と夏陽の間。華陰の諸楊が乱に遇い、壁を築きて以て自ら守る）に據る。魏の司空參軍の河東の薛端糾は村民を帥いて撃ちて東魏の兵を卻けて、復た楊氏を取り、丞相の泰は南汾州（魏の汾州はもと蒲子城に治す、孝昌中に陥る、移りて西河に治す。時に西河は既に東魏に属す、故に西魏は南汾州を楊氏に僞置す）刺史の蘇景恕を遣わして之に鎮す。

■**東魏** 丁卯（3+60-46+1=1 8 日）、信武將軍の元慶和を以て鎮北將軍と為し、衆を帥いて東魏を伐たしむ。

●**東魏** **中間勢力への高歡の懷柔策** 初、魏の孝武帝は既に丞相の歡と隙有り、齊州刺史の侯淵、兗州刺史の樊子鵠、青州刺史の東萊王の貴平（元貴平）は陰に相い連結し、以て時變を觀る。淵は亦た遣使して歡の所に通じる。孝武帝の關に入るに及び、清河王の但（続は宣）は製を承け、汝陽王の暹（せん）を以て齊州刺史と為す。暹は城西に至り、淵は時に納れず。（9-144p）城民の劉桃符等は潜に暹を入れて城に入れしめ、淵は騎を帥いて出で走り、妻子部曲は悉く暹の虜とする所と為る。行きて廣裡（司馬彪の統漢志に、齊北郡盧県に光里有りと。似たり）に及び、會々製を承け（命が清河王の但に出づるをいう）淵を以て青州の事を行わしむ。歡は淵に書を遣りて曰く、

「卿は部曲の單少なるを以て、東行を憚る勿かれ、齊人は澆薄（道德が衰え、人情が希薄）にして、唯だ利に是れ従う、齊州は尚ほ能く汝陽王を迎える、青州は豈に開門して卿を待つ能わざらん也！」

淵は乃ち復た東し、暹は其の妻子部曲を歸す。貴平も亦た代を受けず、淵は高陽郡（宋の文帝は高陽郡を置き、冀州に属す。後に魏に入り青州に属す、山東省膠東道昌樂県、現・濰坊市昌樂県）を襲い、之に克つ。累重を城中に置き、自ら輕騎を帥いて外に游掠す。貴平は其の世子をして衆を帥いて高陽を攻め使め、淵は夜東陽（青州の治所、現・濰坊市青州市）に趣き、州民の糧を饋る者を見、之を給きて曰く、

「台軍は已に至り、殺戮して殆ど盡く。我、世子之人也、脱走して城に還る、汝は何為れぞ復た往くや！」聞く者は皆な糧を棄てて走る。曉ける比い、復た行人に謂って曰く、

「台軍は昨夜已に高陽に至り、我は是れ前鋒なり、今此に至り、侯公の竟に何所に在るかを知らず！」城民は恟懼し、遂に貴平を執りて出で降る。戊辰（4+60-46+1=1 9 日）、淵は貴平を斬り、首を洛陽に傳

える。

東魏 庚午 (6+60-46+1=2 1 日), 東魏は趙郡王の**誡**を以て大司馬と為し, 咸陽王の**坦**を太尉と為し, 開府儀同三司の**高盛**を司徒と為し, **高敖曹**を司空と為す。**坦**は, **樹** (元樹は梁に寄、中大通四年に魏の擒となる) 之弟也。

東魏 **〔高歡は鄴への遷都強行〕** 丞相の**歡**は洛陽は西は西魏に逼り, 南は梁境に近きを以て, 乃ち鄴に遷るを議し, 書 (高歡の命令書) 下り三日にして即ち行ふ。丙子 (12+60-46+1=2 7 日), **東魏主**は洛陽を發し, 四十萬戸は狼狽して道に就く。百官の馬を収め, 尚書の丞郎已上の陪從する者に非ざれば, 盡く驢に乘ら令め。**歡**は後ろに留まりて部分し, 事は畢わり, 晉陽に還る。司州を改めて洛州 (魏の明元帝は洛陽を取りて洛州を置き、孝文帝は遷都して太和 17 年に司州とする、また遷都して洛州に戻す) と為し, 尚書令の**元弼**を以て洛州刺史と為し, 洛陽に鎮せしむ。行台尚書の**司馬子如**を以て尚書左僕射と為し, 右僕射の**高隆之**、侍中の**高岳**、**孫騰**と與に鄴に留まり, 共に朝政を知らしむ。詔して遷民の貲産未だ立たざるを以て, 粟一百三十萬石を出して以て之を賑わす。

● **十一月**, 兗州刺史の**樊子鵠**は瑕丘に據り以て東魏を拒ぐ, 南青州刺史の**大野拔**は衆を帥して之に就く。

東魏 **〔東魏の租税制度〕** 庚寅 (), **東魏主**は鄴に至り, 北城の相州之廨 (役所) に居り, 相州刺史を改めて司州牧と為し, 魏郡太守を魏尹と為す。是の時, 六坊 (魏は宿衛の士を分けて六坊と為す) 之衆は**孝武帝**に従いて西に行く者は萬人に及ばず, 餘は皆な北に徙り, 並びに常廩を給し, 春秋に帛を賜り以て衣服に供し, 乃ち常調之外に於いて, 豐稔之處に隨いて, 絹を折し粟を糶し以て國用に供す。(租税として納めるべき絹の代わりに相当の錢で納めしめて、粟を買い入れる)

【孝武帝毒殺と宇文泰の専権】

● **十二月**, 魏の丞相の**泰**は儀同の**李虎**、**李弼**、**趙貴**を遣わして**曹泥**を靈州に撃たしむ。(9-145p)

■ **閏月**, 元慶和は瀨郷 (河南省開封道鹿邑県、現・周口市鹿邑県) に克ち而して之に據る。

● **〔孝武帝毒殺〕** 魏の**孝武帝**の閨門は禮無く, 從妹の嫁せざる者は三人, 皆な公主に封ず。平原公主の**明月**は, 南陽王の**寶炬**之同産也, 帝に従いて關に入り, 丞相の**泰**は**元氏**諸王をして**明月**を取りて之を殺さしむ。帝は悦ばず, 或る時は弓を彎き, 或る時は案を椎ち, 是に由りて復た**泰**と隙有り。癸巳 (29-15+1=1 5 日), 帝は飲酒し, 鳩に遇い而して殂す (年 25)。泰は群臣と立てる所を議し, 多くは廣平王の**贊**を擧げる。**贊**は, **孝武**之兄の子也。侍中の濮陽王の**順**は, 別室に於いて涕を垂れて**泰**に謂って曰く、

「**高歡**は逼りて**先帝**を逐い, **幼主**を立てて以て専権す, 明公は宜しく其の為す所に反すべし。廣平は沖幼なり, 長君を立て而して之を奉じるに如かず。」

泰は乃ち太宰の南陽王の**寶炬** (孝文帝の孫、京兆王愉の子) を奉じて而して之を立つ。**順**は, **素** (常山王素) 之玄孫也。**孝武帝**を草堂佛寺に殯す。諫議大夫の**宋球**は慟哭して血を嘔き, 漿粒 (飲食物) 口に入らざる者數日, **泰**は其の名儒なるを以て, 之を罪せざる也。

● **〔魏は獨孤信を荊州刺史〕** 魏の**賀拔勝**之荊州に在る也, 武衛將軍の**獨孤信**を表して大都督と為す。東魏は既に荊州を取り, 魏は**信**を以て都督三荊州諸軍事、尚書右僕射、東南道行台、大都督、荊州刺史と為し以て之を招懷す。

東魏 **〔東魏の辛纂は蠻酋に破れる〕** 蠻酋の**樊五能**は攻めて淅陽郡を破り以て魏に應じ, 東魏の西荊州刺史の**辛纂** (時に穰城に鎮す、西荊州は荊州、穰城は東荊州の西に在るを以て故に言う) は之を討たんと欲し, 行台郎中の**李廣**は諫めて曰く、

「淅陽の四面は民無く、唯一城之地にして、山路は深險なり、表裡は群蠻なり。今少しく兵を遣れば、則ち賊を制する能わず。多く遣れば、則ち根本は虚弱なり。脱し意の如くならざれば、大いに威名を挫かん、人情一たび去れば、州城は保ち難し。」

纂は曰く、

「豈に賊を縦^{ゆる}して討たざる可けんや！」

廣は曰く、

「今憂うる所は心腹に在り、何ぞ疥癬を治するに暇あらんや！聞く、台軍（東魏の遣わす軍）は久しからずして應に至るべし、公は但だ屬城を約勒し、（屬城をして）壘を完くし民を撫し以て之を討（待×）たせめよ。淅陽を失うと雖も、惜しむに足らざる也。」

纂は従わず、兵を遣わして之を攻め、兵は敗れ、諸將は因りて亡げて返さず。

●**東魏**■**[獨孤信は東魏の辛纂を破るも梁に逃亡]**城民は密に獨孤信を召す。信は武陶（武關に作るべし）に至り、東魏は恆農（弘農、後魏は顓祖の諱を避ける）太守の田八能を遣わして群蠻を帥いて信を淅陽に拒み、又た都督の張齊民を遣わし歩騎三千を以て信之後ろに出でしむ。信は其の衆に謂って曰く、

「今士卒は千人に滿たず、首尾は敵を受け（田八能がその前を拒ぎ、張齊民が後ろに出るをいう）、若し還りて齊民を撃てば、則ち土民（淅陽の民）は必ず（続により補填）我が退き走ると謂い、必ず争い來たりて我を邀えん。如かず進みて八能を撃ち、之を破れば、齊民は自ら潰えん矣。」

遂に八能を撃破し、勝ちに乗りて穰城を襲う。辛纂は兵を勒して出でて戦い、大いに敗れ、還りて城に趣く。門は未だ闔^とじるに及ばず、(9-146p) 信は都督の武川の楊忠をして前驅と為ら令め、忠は門者を叱りて曰く

「大軍は已に至り、城中に應有り、爾等は生を求めれば、何ぞ避け走らざるや！」

門者は皆な散り。忠は衆を帥いて入城し、纂を斬り以て^{とな}衄え、城中は懾服す。信は兵を分けて三荊を定める。居ること半歳にして、東魏の高敖曹、侯景は兵を將いて城下に奄至し、信の兵は少くして敵せず、楊忠と皆な來奔す。

令和5年1月22日 翻訳開始 11134文字

令和5年2月2日 翻訳終了 24687文字